

二人 婉久 長唄 全詞章 本名題「其面影二人婉久」

たどり行く、今は心も乱れ候
末の松山思ひの種よ、あのや婉久はこれきこれき打ちこんだ、兎角恋路の濡れ衣
〔二上り〕 ほさぬ涙のしつぽりと

身に染み染みと可愛さの、それが嵩じた物狂ひ、とても濡れたる闇なりやこそ
親の異見もわざぐれと、兎角耳には入相の

鐘に合図の廓へ行こやれ行こやれ、さつき行こやれ昨日は今日の昔なり

ぼん様ぼん様ちとたしなまんせ、墨の衣に身はそみもせで

恋に焦るる身は浮船の

よるべ定めぬ世のうたかたや、ゆかりぼうしの其のひと節に

知恵も容量も皆淡雪と

消ゆるばかりの物思ひ、ひとり焦るる独り言、恋しき人に逢はせてみや

兎角心の遺瀬なき、身の果何と浅ましやと、暫しまどろむ手枕は、此頃みするうつつなり

〔夢〕 行く水に、うつれば変る飛鳥川

流れの廓に昨日まで

〔詞〕 ハテ

勿体つけたへ、誓文ほんに全盛も、我は廓を放し鳥

籠は恨めし

心くどくどあくせくと、恋しき人をまつ山は、やれ末かけてかいどりしやんと、しやんしやんともしほらしく、君が定紋伊達羽織、

男なりけり又女子なり

片袖主と眺めやる

思ひざしなら武蔵野でなりと、何ちやおりべの薄盃を、よいさしようがへ、恋に弱身を見せまじと、ひんと強ねては背むけて

くねるなはなと出でて見れば

女心の強からで、跡より恋のせぬ来たれば、小袖にひたと抱きつき、申し婉久さん

〔詞〕 さつてもてつきりお一人さま

〔鼓歌〕 ふられず帰る仕合せの、松にはあらぬ太夫が袖、月の漏るより闇がよい

いいやいやいや、こちや闇よりも月がよい、お前もさうからと寄添へば、月がよいとの言ひ草に、粹な心で腹が立つわいな

〔詞〕 もうこれからが口舌のだん

仔細らしげに座をうつて、袖尺着尺衣紋坂、初冠の投頭巾、語るも昔男山

〔筒井筒〕 筒井筒井筒にかけしまろがたけ、老いにけらしもない見ざる

間にと咏みて贈りける程に、其の時女もくらべごし、振分髪もかたすぎぬ、君ならずして誰があぐべきと、互に詠みし故なれば、
筒井筒の女とも聞えし有常が娘の古き名なりしぞ

〔詞〕 ああ古い古い、女郎買も塩が辛うなった

お茶の口切たぎらす目元にとりつけば

〔詞〕 ああ何ぞいな

〔按摩〕 手持無沙汰に拍子揃へて業くれ、按摩痲痺痲痺、さりととはひきひきいねろ

自体 某は東の生れ、お江戸町中見物さまの、馴染情の御鼠負つよく、按摩痲痺朝の六つから日の暮るるまで

〔詞〕 さりととはさりととは忝ない

按摩冥利に叶ふて嬉し

按摩痲痺、按摩痲痺

里のみうら女郎様ちゑごちゑ、袖をそつと引かばおお靡きやれ、かんまへてよいよい女郎の顔をしやるな、ちゑごちゑ

二人つれだち語るもの
廊々は我家なれば、遣手禿を一所につれだち急ぐべし

遊び嬉しき馴染へ通ふ

恋に焦がれてちやちやとちやとちやと行こやれ

可愛がつたりがられて見たり、無理な口舌も遊びの品よく、彼方へ言ひ抜け此方へ言ひ抜け、裾にもつれてじやらくらじやらくら、

じやらくらじやらくら悪洒落の、花も実もある仕こなしは、一重二重や三重の帯、蒲団の中ぞ候かしく